



Peer Garden

茗溪アルバム

茗溪創基 150 年記念事業

茗溪 150 年の思い出を紡ぎませんか？

山男の歌 II

●山岳部報「這松」

「これなんて読むんですか？」

ハイマツ：高山で地を這うように生育している様から「這松」と書くが、「偃松」は「漢名」に拠るらしい。

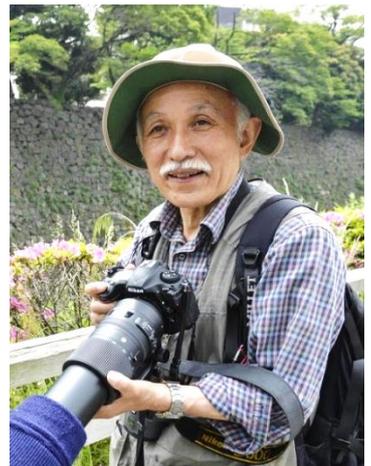
唐沢孝一氏（S41 教大動物）とお会いしたのは、昨年の春、茗溪会館5階の役員室であった。前年に、唐沢氏から「思い出の品（寄贈）」と題するメールをいただいていた。

お会いして、「アツ茗溪人だ」と思った。その風貌に、同窓や先輩の面影があったからである。大学に遺伝子などあるはずもないが、校風というものがある。それを多分に受けて、風貌や風格というものが形作られるのかもしれない。

冒頭のやり取りは、唐沢氏が持参した資料類を前にしてのものである。

『偃松』は、東京教育大学山岳部の部報である。昭和30年度発行を第1号とし、昭和53年度の第11号をもって、最終号としている。

初代顧問の青野寿郎名誉教授は、最終号「東京教育大山岳部の追憶」の中で、「…山岳部の高橋重雄君から東京教育大学の閉学とともに山岳部も閉部のやむなきに至ったので、部報の最終号として11号を発刊するから一筆書いてほしい旨の依頼状を…受け取った」と前書きして、筆を進めている。



部報の題字は、吉富享（S32 英）が「偃松あれこれ」の中で、「青野寿郎先生に、復刊の言葉と表紙題字をいただきたい」（同11号P113）と記しているし、青野自身も「山岳部の学生が研究室を訪ねて依頼されたのに応じたような気がする」（同11号巻頭）と回想している。

最終号の「閉部にあたって―各OBより」に寄稿した部員の中には、女性もいた。

雪下明子は、同じ出身高校の磯田玲子から、母校での進学OB説明会での帰途、山岳部への入部を誘われたと記している。

磯田が入部を申し出たところ、女性部員がいないので、入部するなら女性複数人でと言われ、雪下を誘ったのである。

「ある日、W館地下で開かれた穂高合宿準備会に磯田さんと共に参加したのでした。こちらはそれまで山というのは伊東の大室山しか登ったことはないのに、とにかく磯田さんの積極性におとなしい(?) 私が引きずられた形で山岳部に入ってしまった」（同11号p3）

『茗溪』秋号（112号）で、「山男の歌」から書き始めたが、東教大山岳部には、磯田玲子（S32 芸）、森川明子（S32 数）、河田多美子（S34 芸術）、染谷博子（S35 化）、長坂公子（S38 芸）と、少なくとも5名の「山女」が所属していた。

唐沢の山岳部在籍は昭和37年～41年で、『偃松』第7号（S37～S38）から第9号が刊行された時期にあたる。

『偃松』第7号に収録の「昭和37年度合宿記録」は、新入歓迎コンパ（4/29）に始まり、白馬岳新人強化合宿（5/24～5/27）、夏山合宿（8/2～8/10）、秋山分散合宿（10/14～10/19）、富士山合宿（11/22～11/26）、冬山合宿（12/23～1/2）春山合宿（3/11～3/24）を記録している。

『偃松』第7号の「昭和37年度合宿記録」に唐沢の名前が登場するのは、夏山合宿からである。白馬岳強化合宿に参加した新入生6名に、3名が新たに加わっている。その中の一人が、唐沢であった。

●唐沢は、山岳部に入部する

唐沢が山岳部の部室を「おそろおそろのぞきこんだ」のは、入学して5月になつてからのことである。

「おそろおそろのぞきこんだ」（同P67）には訳があった。

「大学山岳部というのは、遭難や新人のシゴキが時々話題になるなど、恐ろしいところ」（同p67）という印象があった。

現に、その年の正月に遭難事故があり、山岳部員の捜索が続けられていた。

ところで、お会いした時、唐沢氏は、「大学時代の山岳部の事が書いてあるので、参考になるかと思えます」と言って、一冊の本を差し出した。

【都・市・鳥】The Birds 鳥の目から見た都市文明(平成3年、徳増書房初刷)



問

通勤電車の中で、手渡された本を読み通した。興味の尽きない内容であった。この本から広がるもう一つの世界(野鳥人生)については後述することにして、唐沢氏の学生時代に戻る。

それまでは、卓球部に顔を出したり、深大寺で開かれた野外生物研究会新入生歓迎会にも参加していたが、長続きしなかったと、唐沢は述懐する。

「受験という目に見えない重圧からようやく解放された」(同p66)唐沢にとって、「自分自身が激しく燃焼できるもの、肉体も精神も極限の状態にまで追い込んで、自分とは何かをとことん試せるような世界」(同p67)を求めていた。

「狭い部室には、机が一つあり、数人の部員が待つてましたとばかり声をかけてくれた。：チーフリーダーの剣持二郎さんは文学部哲学科の4年生であったが、いかにも穏やかで、山を語るときは、なかなか思索的であり、内に秘めた山へのロマンが感じとれた。：剣持さんに会ったその時点で、入部を決意した。」(同p67)

群馬と長野の県境に嬭恋村がある。唐沢はその村で幼少時を過ごしたが、中学卒業と同時に、前橋駅に近い民家の二階の北向きの四畳半で一人暮らしを始めた。前橋高校に通うためであった。

村の精米所のオート三輪車で、大きな布団の包みと衣類の入った行李など、引っ越しの荷物を運んでもらった。

「その夜、購入したばかりの机や椅子を窓際に並べ、畳の上に仰向けに寝転ぶ。目を瞑ると、母が：何か言葉にならない言葉で私に話しかけながら嬭恋に帰っていく。：家族そろってにぎやかに夕食をとっている光景などが、あたかもスライド写真でもみているかのように次々と現れては消えていく。突然、満天の夜空に輝く星の光がかき消されたかと思っ目を開けると、下宿の天井からぶら下がる小さな電灯がボーと光っていた。」

嬭恋村で幼少期を送り、村を巣立つよううに都会へ赴き、「とてつもなく遠い異郷の海を浮遊している不安」(同p48)を感じながら一人暮らしを始めた唐沢にとって、「山岳部は、少人数の村社会のようなもので、強い絆で部員同士が結びついて

おり、これが煩わしいと感じることもないわけではなかったが、しかし、私は、そうした濃厚な人間関係をあえて求めていたのかもしれない」(同p68)

こうして、唐沢の山岳部活動が始まる。夏山合宿に参加した新入生は、唐沢の他に8名いたが、山岳部員として卒業したのは、唐沢と、犬飼凱雄(豊)、西木克侖(勤)、金井千直(法政)の4名である。

夏山合宿に新たに加わった新入生に、榊泰明がいた。

榊の兄嘉夫(S38数)も山岳部員であったが、その年の冬山合宿で遭難し九死に一生を得ていた。「兄の遭難で学校側や山岳部の方々におかけしたご迷惑やさまざまなで山岳部にははいらないように」(同8号p27)という母の厳命によるものであったが、やはり好きな山を断ち切ることはできず、入部したのであった。

写真は、昭和58年、剣岳早月尾根の春合宿で、唐沢と犬飼との写真である。東京オリンピックの年であった。



*文中では、敬称を略させていただいた部分もございます。ご容赦ください。

思い出の品々の寄贈(お願い) 茗溪創基150年記念事業

「茗溪創基150年記念事業」への参加のあり方として、「思い出の品々」を寄贈していただく企画を実施しています。

1 ご寄贈いただく「思い出の品々」について

- ・「思い出の品々」につきましても、その内容の指定や限定はございません。
- ・ご提供頂く場合、「簡単な説明」等を添えていただければ幸いです。

2 送り先

- ・電子資料は、メールにて (peer@meikei.or.jp) までお送りください。
- ・郵送先は、「茗溪会大塚事務所」宛てに願います。

〒112-0012 東京都文京区大塚 1-5-23 茗溪会館内 (電話 03-3941-0136)